

小布施の“交流”によるまちづくりに関する考察

法政大学大学院 政策創造研究科 博士(工学)、博士(政策学) 上山 肇

キーワード：小布施、まちづくり、交流、観光、オープンガーデン

1. はじめに

「観光」はそもそも国際平和と国民生活の安定を象徴し、その持続的発展は、恒久平和と国際社会の相互理解の増進を念願し、健康で文化的な生活をもたらす。また、地域経済の活性化や雇用の機会の増大など国民経済のあらゆる領域にわたって、その発展に寄与するとともに、健康の増進や潤いのある豊かな生活環境の創造といったことなどを通じて国民生活の安定向上に貢献する¹⁾。

北信濃の小布施には年間120万人もの観光客が訪れるが、町としてこの「観光」による「観光立町」を目指していない。小布施の魅力を語る時に、必ずといっていいほど登場するキーワードが“交流”という言葉である。田舎の豊かさの中にデザインを効かせ、豊穡の美しさを、住む人や訪れる人が味わえるように町民の力が働く。120万人の交流人口をフルに活かすことにより、自然に知恵と英知が広がり、循環しながら美しく着地して

いく²⁾。

本稿では、こうした小布施が現在進めているまちづくりについて、行政と事業者に対しヒアリングすることにより小布施の“交流”によるまちづくりの現状を探り、その実現状況を見ながら、市街化された地域、特に都心において、文化・観光の拠点をつくる可能性について探ることを目的とする(写真1~3)。

2. 小布施のまちづくり

町の面積19.07km²。県内一小さいこの町は明治期から3回合併を繰り返し「小布施町」となった。人口約1万1千人、約3,700世帯で町役場を中心に半径2km圏内にはほとんどの集落は入る(図1)。

現在、小布施は、「商う」・「創る」・「集う」・「競う」・「学ぶ」という観点からまちづくりを展開している。



図1 小布施町の位置(出典:信州おぶせ、小布施町役場³⁾)



写真1 小布施堂



写真2 小布施堂界隈



写真3 北斎館

(写真1~3:筆者撮影,2013.12.6)

(1)「商う」

江戸時代にこの地で栄えた「六斎市」は、物を介した人と人との交流の証であり、小布施が文化の香り高い町として発展する基礎となった。小布施の歴史を伝える市を復活させたいと、伊勢町・中町・上町・横町の町組商人が中心となり立てた「安市」もある。これは今も約6万人の人が押し寄せる一大イベントとなっている。

(2)「創る」

“まちに大学を、まちを大学に”を合言葉に、東京理科大学（2005年）、信州大学（2011年）、法政大学（2011年）がそれぞれ小布施に研究所を開設し、大学と子どもが知恵を出す、未来のまちづくりが行なわれている。

(3)「集う」

「小布施見に（ミニ）マラソン」は2003年にスタートしたが、毎年7月の「海の日」に開催されている。現在では7,000人もこの大会に出場し「出会いの場」を大切にしている。

(4)「競う」

小布施の内なる“交流”の場として、町民総出の大運動会が開催されている。1956年に始まったこの大会には全28の自治会、延べ3,000人以上の老若男女が集っている。交流の町である小布施のアイデンティティは、この内なる“交流”から生まれ、これによって町民の結束が一層強くなっている。

(5)「学ぶ」

2012年、「第1回小布施若者会議」が3日間開催された。ここには35歳以下240人もの人々が小布施の未来について語りあった。ここでは提案して終わりではなく、いいアイデアについては行政や地元企業が積極的にコミットし、まちづくりや町政に反映させていくことになる。

3. 調査

今回現地では、(1) 町役場担当者へのヒアリング (2) 株式会社 文化事業部 セーラ マリ カミングス氏へのヒアリング及び“まち歩き”を行っている。

(1) 町役場担当者へのヒアリング

2013年12月6日（金）午前、町役場担当者（行政経営部門・行政改革グループ）へのヒアリングを行った。ここで改めて“観光”について投げかけたが、町としては、決して“観光”ということだけでなく、“交流”という視点で定住人口を増やしていきたいという気持ちが強いことがわかった。



写真4（左）セーラマリカミングス氏による説明
 写真5（中）まち歩き（栗の小径）
 写真6（右）まち歩き（オープンガーデン）
 （写真4～6：筆者撮影、2013.12.6）

(2) 株式会社 文化事業部 セーラ マリ カミングス氏へのヒアリング

同じく6日（金）午前、セーラ マリ カミングス氏からヒアリングを行った。このヒアリングから「地域まちづくりには、地方の武器とも言える親しみやすさからくるコミュニティや文化拠点がかかすことができず、小布施の場合には『雇用の場づくり』ができ、その結果、交流人口が増え経済が安定している。」ということなどを聞くことができた。「他との違いをつくるのは“人”」「客人（まれびと）へのおもてなし」という言葉が印象的だった（写真4）。

(3) まち歩き（写真5）

まちを歩いていて特に印象に残ったのがオープンガーデンの取り組みである。個人の空間を一般の方々に提供しようとするこの試みは、緑を活用したコミュニティ形成という点でも都会においても参考になる。具体的には次の「4.」でその取り組みについて紹介する。

4. オープンガーデンの取り組み（写真6）

(1) 潤いのある美しいまちづくり

1980年、住民の日常生活に潤いのある環境を提供しようと町内自治会に「町を美しくする事業推進委員会」が発足し、地区単位による部下運動が進められた。

1981年には、住む人の心を大切にした歴史と文化の町を目指す「第2次総合計画」を策定し、自然文化と景観の調和した美しいまちづくりに町花（りんご）、町木（栗）、普及花（すみれ草、サルビア、萩）を設定し景観形成の柱とした。

そこで、この後期計画に「うるおいのある美しいまちづくり」を加え、まちづくりにおける景観形成の指針として環境デザイン協力基準を策定し緑化や花壇づくりなど自主的な運動方針を示した。

(2) 花のまちづくりの3つのコンセプト

官民一体の花のまちづくりへの取り組みは、ヨーロッパ花の研修などを通じ全町的な広まりを見せる中で、個人の趣味のガーデニングがまちづくりにもたらす効果を明確にし、目的と参加意欲をもって取り組みが行えるよう花によるまちづくりの理念を定めた。

これは“外はみんなのもの、内は自分のもの”という概念から、住民と行政の役割を明確にし、①美しいまちづくり ②心の文化を育てる ③町の資源を有効活用するの3つの基本方針を掲げている。

そして、この方針の一番目に掲げる美しいまちづくりに花をもって取り組むため、①花によってまちを装う ②花によって福祉の心を育てる ③花をまちの産業に育てる の3つの目標を定め、花によるまちづくりの基本方針を明確にした。

(3) 花の情報発信と生産基地の建設

1992年に「フローラルガーデンおぶせ」を開園した。2005年からは、一年草、プラグ苗の生産・販売に加え「ペレニ・デポ（宿根草基地）」として数十種類の宿根草

を生産・販売している。この宿根草の導入により、今後花産業の活性化を図ろうとしている。

5. おわりに

小布施というと未だに“観光”ということに目を向けがちだが、今回改めて調査・視察を行うことにより小布施のまちづくりを“交流”という視点で捉えることにより“持続可能性”という点でまちづくりに大きな意義があることを再確認することができた。

また、小布施の場合には“人”によるまちづくりを考えると今回ヒアリングしたセーラ マリ カミングス氏のような人材の活用とその継承ということが今後の大きな課題であることがわかった。

一方、市街化された都市における文化・観光の拠点形成への応用という観点では、小布施でのオープンガーデンの取り組みが、緑を活用した“交流”によるコミュニティ形成の可能性を探る上でヒントを与えてくれる。

参考・引用文献

- 1) まちづくりキーワード辞典、三船弘道+まちづくりコラボレーション、p34、学芸出版社、2009年7月
- 2) 小布施—このまちに息づく循環の美学—、(株) まちねみカントリープレス
- 3) 信州おぶせ、小布施町役場、pp4-5